

氏名	宮島 章子
学位の種類	博士 (文学)
報告番号	甲第 585 号
学位授与年月日	2022 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則(昭和 28 年 4 月 1 日 文部省令第 9 号) 第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	Regionalität in Johann Jakob Bodmers Übersetzungen von Miltons <i>Paradise Lost</i> — Von der diatopischen zur diastratischen Profilierung — (ボードマーによるミルトン『失樂園』ドイツ語翻訳にみる地域性)
審査委員	(主査) 井出 万秀 (立教大学大学院文学研究科教授) 前田 良三 (立教大学名誉教授) アーント・バイゼ Arnd Beise (フリブール大学文学部教授) ヘーレン・クリステン Helen Christen (フリブール大学文学部教授) レグラ・シュミードウリー Regula Schmidlin (フリブール大学文学部教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

本論文はドイツ語で執筆されているが、論文の構成は日本語で記す。

1. テーマおよび研究目標
2. ボードマーの言語理論コンセプトにおける文体次元多面性
 - 2.1 ボードマーの言語理論
 - 2.2.1 ボードマーの文体通時的次元への視点：中世高地ドイツ語
 - 2.2.2 ボードマーの文体地理的次元への視点：スイスドイツ語
 - 2.2 ボードマーの翻訳理論上の立ち位置と実践
 - 2.2.1 言語の「本質的な美しさ」
 - 2.2.2 「強力な語彙」の役割について
 - 2.2.3 先行するミルトン翻訳に対するボードマーの文体上のコメント
 - 2.2.4 ミルトン翻訳改訂の理由
 - 2.2.5 ミルトン翻訳改訂の傾向
3. ミルトン『失樂園』のボードマーによる翻訳
 - 3.1 ボードマー翻訳からのサンプル抽出分析
 - 3.1.1 翻訳修正における不変性
 - 3.1.2 翻訳修正における傾向
 - 3.1.3 翻訳修正の言語レベル
 - 3.1.3.1 形態レベル
 - 3.1.3.2 統語レベル
 - 3.1.3.3 語彙レベル
 - 3.1.3.4 中間結論—各言語レベルでの修正規模の変遷
 - 3.1.4 分析対象とする言語レベルおよび修正版の選択
 - 3.2 1732, 1742 および 1769 年版の翻訳比較
 - 3.2.1 分析方法
 - 3.2.2 ボードマーの上記3つの版における修正分量
4. ボードマー語彙の文体的分析
 - 4.1 語彙の文体次元特性を特定するための方法論について
 - 4.1.1 アーデルンク『標準ドイツ語方言文法的批判的辞書』
 - 4.1.2 グリム『ドイツ語辞典』
 - 4.1.3 『スイス方言辞典』
 - 4.2 同時代ドイツ語翻訳との比較
 - 4.2.1 語彙選択への地理的影響
 - 4.2.2 翻訳の時系列順序

- 4.2.3 同時代ドイツ語翻訳との語彙的一致と相違
- 4.3 ボードマー語彙の文体地理的次元特性の特定
 - 4.3.1 アーデルンク辞書記載に基づく語彙の文体地理的次元特性の特定
 - 4.3.1.1 アーデルンクに基づく文体地理的次元特性の特定
 - 4.3.1.2 1732年版における地理的方言語彙
 - 4.3.1.3 1742年版における地理的方言語彙
 - 4.3.1.4 1769年版における地理的方言語彙
 - 4.3.2 『ドイツ語辞典』および『スイス方言辞典』辞書記載に基づく補完的な地理的方言語彙特定
 - 4.3.2.1 『ドイツ語辞典』辞書記載に基づく補完的な地理的方言語彙特定
 - 4.3.2.2 『スイス方言辞典』辞書記載に基づく補完的な地理的方言語彙特定
 - 4.3.2.3 未収録語彙
 - 4.3.3 他のドイツ語翻訳との一致語彙における地理的方言語彙
 - 4.3.4 いくつかの地理的方言語彙についての紹介
 - 4.3.4.1 地理的方言語彙としての辞書記述のある語彙
 - 4.3.4.2 地理的方言および古語語彙としての辞書記述のある語彙
 - 4.3.4.3 地理的方言および雅語語彙としての辞書記述のある語彙
 - 4.3.5 中間結論—ボードマー語彙における地理的方言語彙の減少
- 4.4 ボードマー語彙の文体通時的次元特性の特定
 - 4.4.1 アーデルンク辞書記載に基づく古語特定
 - 4.4.2 『ドイツ語辞典』辞書記載に基づく補完的な古語特定
 - 4.4.3 いくつかの古語についての紹介
 - 4.4.4 他のドイツ語翻訳との一致語彙における古語
 - 4.4.5 中間結論—ボードマー語彙における古語の減少
- 4.5 ボードマー語彙の文体社会的次元特性の特定
 - 4.5.1 アーデルンク辞書記載に基づく雅語特定
 - 4.5.2 『ドイツ語辞典』辞書記載に基づく雅語特定
 - 4.5.3 いくつかの雅語についての紹介
 - 4.5.4 他のドイツ語翻訳との一致語彙における雅語
 - 4.5.5 中間結論—ボードマー語彙における雅語の優位
- 5. 結論—優先される文体次元の移行およびライプツィヒ派の影響
文献一覧

(2) 論文の内容要旨

本論文は、18 世紀スイスの文芸評論家および作家であるヨーハン・ヤーコブ・ボードマー (Johann Jacob Bodmer: 1698-1783) が、イギリスの詩人ジョン・ミルトン (John Milton: 1608-1674) 作の叙事詩『失樂園』(Paradise Lost, 1667) を訳したドイツ語訳を分析し、スイスドイツ語というボードマーの地域性がどのように現れ、推移しているかを研究する論文である。このボードマーによる『失樂園』のドイツ語翻訳は 1732 年に初版がスイス・チューリヒで出版され、それ以降、1742 年、1754 年、1759 年、1769 年、1780 年と 5 回も改訂出版がなされている。これらの翻訳修正において、スイス方言語彙がどのような位置づけにあったのかを究明することが研究の出発点である。この 18 世紀当時はドイツ語圏全体に「標準ドイツ語」と呼ばれる規範的な言語(書きことば)はまだ存在しておらず、また政治的中枢を持たないドイツ語圏にあっては、特定の地域のドイツ語がドイツ語圏全体に規範的言語として浸透することはなく、それぞれの方言地域における言語慣習が共存し、出版活動などを通じて自然発生的に平準化のプロセスを辿る過程にあった。そのような中で、現在では話しことばと書きことばが異なる言文不一致状態にあるスイス方言が、当時は現在とは別の影響力や潜在性を持っていたのか、という問題的是ドイツ語書きことば標準化プロセスにおける興味深いテーマである。というのも、当時啓蒙思想のもと論理的で明晰な表現を美德とした文芸評論家かつ作家であるヨーハン・クリストフ・ゴットシェート (Johann Christoph Gottsched: 1700-1766) を中心とするライプツィヒの評論家、作家、知識人らがドイツ語圏における文学創作活動において大きな影響力を及ぼしており、その中で敢えて地域性や歴史性、不合理なもの良さを前面に出したボードマーは、その同志であり文芸雑誌の共同編集者でもあったヨーハン・ヤーコブ・ブライティンガー (Johann Jakob Breitinger: 1701-1776) とともに、このライプツィヒの啓蒙主義的文学に真っ向からアンチテーゼを提唱していたからである。

筆者は、第 1 章において論文の研究対象および研究目標を明確にし、ボードマーの『失樂園』翻訳における語彙について、同時代の知識人アーデルンクによるドイツ語辞典『標準ドイツ語方言文法的批判的辞書』における文体についての辞書記述を手がかりとして、地理的、通時的、社会的にその特性を特定するという方法論上の概略を述べる。

第 2 章においては、ボードマーの翻訳理論をボードマーの理論的諸著作において吟味し、ボードマーが翻訳においてどのような側面を重視していたのかを確認する。ボードマーの翻訳理論では、通時的側面と地域的側面が強調され、中世高地ドイツ語に遡る古語かつスイス方言語彙が高い評価を得ていることを確認する。スイス方言は話しことばでは現在でも中世高地ドイツ語の音韻体系を維持しており、スイス方言語彙においては現代ドイツ語では消滅してしまった古い形態が保持されているからである。後者の語彙をボードマー自身は「強力な語彙」と呼び、迂回的で分析的なライプツィヒ周辺のザクセン方言語彙よりも優れているとしている。また、自分の翻訳に先行するゴットフリート・フォン・ベルゲ (Gottfried von Berge) による 1682 年の『失樂園』翻訳も自身の翻訳論に基づいた批判がなされていることを確認する。第 3 章においては、ボードマーの翻訳を分析するにあたって、分析対象とする版および言語レベルを特定するために、サンプル分析を行い、ミルトンのオリジナルテキストの冒頭 105 行とそれに対応するボードマーの翻訳のそれぞれから対応する箇所を取り出し、どのような修正がなされているのかを確認する。分析対象とされる版

は、初版の他、修正がすべての版の中で最も多い1742年版と、最後に修正がなされた1769年版を分析対象とし、対象とする言語レベルとしては、同じくもっとも修正の多かった語彙レベルを分析対象とする。分析対象とされる語彙は延べ総数で約 2400 語になる。言語レベルの修正については、分析対象となる語彙レベルのみではなく、形態レベル、統語レベルでも修正の傾向や特性を論じている。語彙レベルにおける修正は、大多数の場合において、オリジナルテキストと同じ品詞で翻訳がなされ、同じ品詞で語彙が修正のたびに入れ替えられる、という特性を明らかにし、この語彙の入れ替えにおいて、地理的方言語彙がどのような役割を果たすのか、という点に焦点を当ててを明確にする。

第4章が分析のメインとなる章で、対象とした3つの版において、入れ替えられている語彙の文体次元それぞれの諸特性を、同時代のドイツ語辞典の辞書記述を手がかりとして、特定する分析を行う。文体次元は、地域性、通時性、社会性の3つの次元に区別され、地域性をもつ語彙は一般・狭義には「方言」と呼ばれ、通時性においては古語が区別され、社会性においては雅語が区別される。これらの文体的特徴の判断は、アーデルンク編集のドイツ語辞典『標準ドイツ語文法的批判的辞書』の記載に基づく。アーデルンクのドイツ語辞典に収録されていない語彙についてはグリムの『ドイツ語辞典』において収録・記載を確認する。ボードマーが入れ替えた語彙がすべて上記辞書記述に基づき、3つの次元について、その文体的特性の特定を行う。その結果、いわゆる狭義のスイス方言語彙は初版でのピーク以降、版を重ねるごとに減少し、また古語も初版でのピーク以降、版を重ねるごとに減少するが、雅語は版を重ねるごとに増加していることが判明する。また、方言語彙および古語も、同時に雅語である場合には、後の版でも使用されていることも判明する。

5章では、これまでの分析結果がグラフなどヴィジュアルな形で示され、文体的特徴の3次元において、優位にある次元の変遷を視覚的に可視化して示している。また、3つの次元の相互関係からは、初版がボードマー以前の先行翻訳と同様な文体次元の相互関係を示すのに対して、1742年版以降は、ボードマーの翻訳すべておよびボードマー以降のドイツ語翻訳が同様な文体次元の相互関係を示していることがわかる。第5章でのもうひとつの課題は、どのようにしてボードマーが自身の語彙の地域性に気づき、修正したのか、という問いである。この点についてはライブツィヒの知識人クラウダーとの書簡内容から、クラウダーが修正案を出し、またそのような修正をボードマー自身も望んでいることがうかがわれるが、クラウダーの指摘にもとづく修正はボードマーの翻訳の中でそれほど大きな比重を占めるわけではないことも判明する。

Ⅱ. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

18世紀、ボードマーおよびブライティンガーなどのスイスの文学者と、ゴットシェートなどのライプツィヒの文学者らの間の論争において、スイス文学者らは方言や古語を支持し、ライプツィヒ文学者らは啓蒙主義的合理性を支持するという構図が文学史記述においては定着している。実際、ボードマーの翻訳論もこのような文学史記述の構図を裏付ける言説となっていることは筆者の研究からも明らかである。しかし実践はどうであったのか。ボードマーが入れ替えた語彙を、同時代の辞書記述を手がかりとして、地理的、通時的、社会的の3つの文体次元に関してそのルーツを示した実証的研究はこれまでのところ存在しない。筆者はそのような実証的研究を、辞書記述を丹念に吟味し、入れ替えた語彙の文体次元ごとにその特性を明確に示した方法論は極めて緻密である。そしてその結果、翻訳論の中でボードマーが高く評価する方言語彙と古語が版を重ねるごとに減少していることを実証的に示したこと、および方言語彙および古語で残された語彙の多くは同時に雅語としても辞書記述されていることを突き止めた点は、この論文の大きな成果である。またこれらの結果をグラフ化することで可視化している点も高い評価に値する。入れ替えられた語彙については、該当箇所が分析対象とした版すべてから用例として逐一示されており、語彙入れ替えの効果を読者自身が検証できるようになっている。

(2) 論文の評価

上記の論文の特徴に記したように、文学論争の中でもボードマーが支持しているスイス方言と古語が版を重ねるごとに減少し、雅語が優勢になっていく文体次元の変遷を客観的かつ実証的に示し、ボードマーを単純に言語地域性擁護者と見なすことができないことを突き止めている点はこれまでの研究にない特徴であり、大きな評価に値する。この結果は同時に、翻訳論の中でボードマーがスイス方言と古語を肯定的に評価する主張をしているのと同時に、翻訳実践の中ではスイス方言語彙と古語が減少している、という理論と実践の間での齟齬を示す結果となっているが、この齟齬についての考察が十分になされていないのは惜しむべき点である。この背景には、18世紀半ば、ドイツ語圏においてまだ「標準ドイツ語」というべき規範的な書きことばが確立されていないという事情があり、標準ドイツ語への書きことば平準化のプロセスはさまざまなルートを経ることになるが、版を重ねるごとに雅語が優勢になっていくこと、雅語とも見なされる方言語彙および古語が残っているという分析結果は、書きことば平準化プロセスの重要な一面を反映している可能性も否定できない。このようなドイツ語史上での位置づけがなされていないことはこの論文の欠点ではあるが、本論文の結果を前提として、ドイツ語書きことば平準化プロセスの考察へとより一般化・視野を広げていくことが可能であり、その意味では今後の研究の前提となる基礎を築き上げたという点で評価される。